

目的 大裁女物単衣長着(ゆかた)は、平面構成である。そのため、製作にあたっては、立体構成の被服(洋服)ほど、細部にあたる採寸は行わない。しかし、洋服が完全に日常着となり、着物離れが著しい今日においては、着物を着用する際にも洋服感覚となり、体型と着物の寸法のありかたについては、いくつかの問題が生じてきている。以上のことに着目し、第一報においては裾についての考察を展開したが、本研究では、製作の上で裾と関係があると考えられるものの中で、身幅について考察することを目的とした。

方法 英立女子大家政学部・被服構成和裁の授業履修者を対象として、各自が製作したゆかたも着用したところを、特に脇線(脇縫い)の位置に注目して観察を行った。ゆかた製作のための身幅の採寸方法は、後幅 = 腰囲 $\times \frac{1}{4} + 6$ (ゆとり) と前幅 = 腰囲 $\times \frac{1}{4}$ とによって対象者各自の寸法とした。観察結果より、身幅特に後幅寸法において問題点となる6cmのゆとり量の可否についても考察を行った。

結果 対象者の横向き姿勢から、脇線が前に寄り過ぎていていると思われる者が多数いた。これは、後幅に6cmのゆりみを入れてい子為と考えられる。体格が向上することにより、裾寸法が長くなった。そのため、体格に沿った寸法をそのまま後幅に用いると肩幅と後幅の差が大きくなり製作上支障が生じるので6cmのゆとり分が必要となっているのである。

今後このような状況を防ぐためには、後幅の設定だけでなく、縫製の仕方や布の織中について検討を加え、更には裾寸法に対する考え方にも見直しが必要であると思われる。